



## 聖木曜日 (ヨハネ 13:1-15)

聖体によって一つにする、結ぶ

聖なる三日間が始まります。主イエスの過ぎ越しの神秘を、聖なる三日間を通してわたしたちも体験することにしましょう。福音朗読は最後の晩餐の途中、弟子たちの足を洗うという場面でした。最後の晩餐にちなんで、食事について思い出すことから少し話したいと思います。

わたしの幼い時、母親は安い魚を手に入れてすり身にして味噌汁を作って食べさせてくれました。たとえばエソを下ごしらえして、すり鉢で小骨もいっしょにすって塩で味を調べ、鍋の中に少しずつ入れていました。熱が加わると、固まってみそ汁の具になりました。この料理はわたしも受け継ぎました。

イエスはご自分を食べ物として与えました。食事の席は、人と人とを引き寄せ、結び合わせる力を持っています。イエス自身が、人と人を引き寄せ、結び合わせる食材となってくださいました。どのように食べなさいとか、どの人は食べるにふさわしいとか、何も要求せず、ただ黙って食べられてしまう存在になりました。この点は重要です。

今日の洗足式も、イエスの食べ物になるという姿勢が込められていると思います。足を洗う時、足をこのように差し出せとか、右足から出せ左足から出せとか、何も言わず、ただ黙って足を洗います。ここにも、イエスが弟子たちを引き寄せ、イエスに固く結び合わせる働きが表されています。

司祭の働きも、極めれば極めるほど、小言を決して言わないで仕える姿に変わっていくはずです。司祭が奉仕しやすいようにお膳立てをしるとか、司祭の都合が最優先だとか、どうでもいいことです。司祭の働きは、突き詰めれば食べられてしまう存在になることなのです。

主イエスの模範は、弟子たちにとどまりません。「あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない」(13・14)という呼びかけは、イエスを信じるすべての人に及んでいきます。足を洗う動作は、僕の中でも最も低い僕に命じられた務めだったと言われます。イエスは、最も低い僕に自分を置くことを互いに実践しなさいと言われ残されたのです。

今の時代に生きるわたしたちには、僕という身分はないので、なかなか実感が湧かないかもしれません。けれどもイエスは、「食べ物」「食材」となって、また食事の途中に弟子たちの足元に膝をついて、互いに実践すべきお手本を残してくださったのです。

わたしは、生活の場で、食べ物となる覚悟があるでしょうか。自分から食べる人を選べないし、ひょっとしたら食べてもらえないこともありうる、そんな身分に自分を置く覚悟があるでしょうか。決して膝をつきたくない人前で、膝をつく覚悟ができているでしょうか。イエスはその心構えを、今日からの聖なる三日間でわたしたちに求めます。